Department of Technology and Innovation Management
Department of Innovation Science

School of Environment and Society

Tokyo Institute of Technology

環境・社会理工学院

イノベーション科学系 イノベーション科学コース

技術経営専門職学位課程

東京工業大学
Tokyo Institute of Technology

特色と目指す人材像

イノベーション創出のリーダーとして科学・技術を活用し、自ら理論を構築して産業や社会の発展に貢献する実務家を養成します。科学・技術の分野における最先端の知識と理論に基づき、現代社会の諸問題に対して科学的に解決することができる人材を養成します。

技術経営専門職学位課程

ミッション・ビジョン

イノベーション創出のリーダーとして科学・技術を活用し、自ら理論を構築して産業や社会の発展に貢献する実務家を養成します。科学研究・技術開発に強みを有する本学の特長を活かし、社会人を中心とする様々な専門性を背景とする学生を受け入れ、社会に輩出します。

目指す人材

技術経営を実践する総合型リーダーとして、幅広い視野をもち高い倫理観のもとに科学・技術を活用し、事実に基づいて自ら構築した論理に立脚して責任のある決断ができ、産業や社会の発展に貢献する実務家を養成します。

5つの特長

1 技術経営のリテラシー・スキルを修得する体系的なカリキュラム

技術経営に関する最先端の知識を体系的に学ぶことができます。新規事業の企画立案や、戦略策定、組織設計、知的財産・標準化マネジメントなどの技術経営のリテラシーの習得だけでなく、論理的思考力やコミュニケーション力といった汎用的な能力を磨きます。学内外の講師による講義を通じて、本学において実施されている先端技術開発の最前線や、企業経営や政策動向の最前線への理解を深めることができます。

2 プロジェクトレポートによる実践的演習

技術経営を実践する総合力を養うために、学術研究にとどまらない広義の研究活動を実施し、その結果をプロジェクトレポートとしてまとめる実践的演習を行っています。各学生が実務で培った知識や経験に加え、本課程で開講されている講義等を受講することで得られる学理や方法論などを用いて、指導教員のもと、調査・研究プロジェクトを実施します。

3 ゼミ（技術経営講究）による研究活動

研究室ごとに定期的にゼミが行われています。少人数で実施されるゼミでは、技術経営に関する各自の問題意識のもと、活発な議論がなされ、充実したものになっています。また、様々なバックグラウンドからなり経験豊かな社会人学生の参加により、インタラクティブで知的刺激に溢れる場になっています。

4 デュアルディグリープログラム（PhD×MOT）

本学の博士後期課程に在籍する学生を対象に提供する、博士と技術経営修士（専門職）を共に取得するプログラムです。科学・技術を深く探求すると同時に、技術経営に関する専門知識を習得することで、科学的発見や技術的発明をもとに、新たな社会的・経済的価値を産み出すイノベーション創出のリーダーを養成することを目的としています。口述試験による選考で、追加の授業料負担はありません。

5 柔軟なカリキュラムの設計と選択

学生一人ひとりが自分の関心や背景知識、学習目的に応じ、教員による履修指導のもと、アラカルト形式で履修メニューを設計することができます。例えば、サービス・情報、バイオ・医療、エネルギーなどの特定の領域を選択し集中的に学習することが可能です。

イノベーション科学系 イノベーション科学コース（博士後期課程）

ミッション・ビジョン

イノベーション創出のための実践的かつ卓越した知を創出し、イノベーションの実現に貢献することで、産業や社会の発展を主導することができる知的プロフェッショナル人材を養成します。イノベーションサイエンスの学理の構築・体系化を目的とし、他領域の専門家や海外のトップスクールとも連携しながら、研究・教育・社会連携を実施しています。

目指す人材

イノベーション創出のために、必要な科学技術の叡知を総動員し、新たな理論や知見を産み出すとともに、社会課題の解決や豊かな未来社会の創成に貢献することができる人材を養成します。

5つの特長

1 イノベーションサイエンスの国際的な研究教育拠点

将来のイノベーションの創成のためには、過去の事例の分析のみならず、グローバルな視点に立って、イノベーションに関する知的フロンティアを開拓していく必要があります。本コースでは、イノベーションサイエンスの国際的な研究教育拠点として、国内外の様々な機関や研究者と協力しながら、研究教育を実施しています。

2 世界トップクラスの研究者による研究指導

本コースには、科学技術イノベーションやイノベーションシステムに関する卓越した研究者が多く在籍しています。世界トップクラスの研究者による研究指導を受けることで、世界のトップスクールや国際機関で世界に伍して戦い、活躍できる一流の研究者を育成します。

3 システマティックレビューを通じた知的俯瞰力の獲得

イノベーションのために必要となる知識は多様かつダイナミックに変化しています。本コースでは、システマティックレビューを実施することで、必要に応じて、自然科学や工学、人文・社会科学などの多様な研究領域の最先端の学術的知識を俯瞰的に学ぶことができます。

4 実践的研究を通じたイノベーション実践力の養成

イノベーションは行動を伴います。産業界や政府、国際機関等の学外の様々なステークホルダーと協調し、イノベーション創成のための実践的な研究を行うことで、イノベーションを担う知的プロフェッショナル人財を継続的に社会に輩出していきます。

5 国際会議発表等による国際的なプレゼンスの向上

教員が実施している様々なプロジェクトに参画する等の方法により、実施した研究の成果を国際会議等で発表することが可能です。これにより、学生一人一人が国際的なプレゼンスを向上させること、それに向けた一歩を踏み出すことを期待しています。

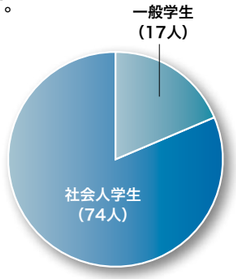
多様な学生に配慮した学修環境

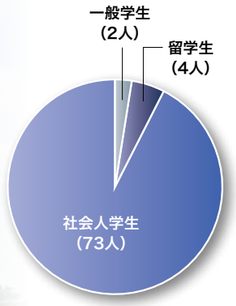
一般学生、社会人学生および留学生の多様な就学ニーズを踏まえ、東京工業大学の秀れた立地と教育研究インフラをもとに、国内トップレベルの学修環境を提供します。

学生の多様なバックグラウンド

一般学生、社会人学生及び留学生が共に学習することにより、多様な価値観や考え方を学ぶことができます。

技術経営専門職学位課程
在校生 構成比率



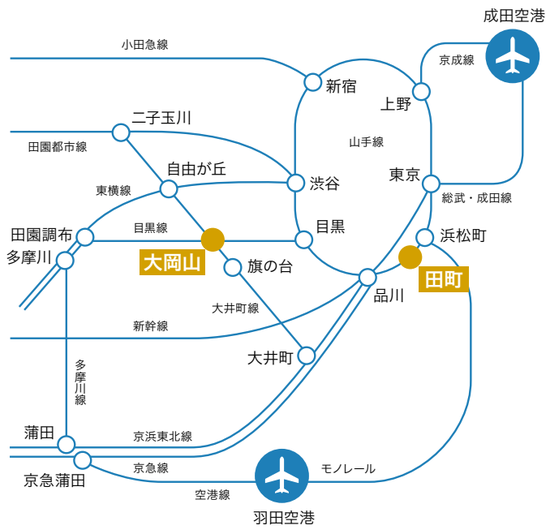


イノベーション科学系
イノベーション科学コース
（博士後期課程）
在校生 構成比率

（2023年2月現在）

良好なアクセス

講義やゼミが行われる田町キャンパス・大岡山キャンパスともに、平日の終業後の通学に便利な場所にあります。



大岡山キャンパス 東急大井町線・目黒線 （大岡山駅下車 徒歩1分）
田町キャンパス JR山手線・京浜東北線（田町駅下車 徒歩2分）

社会人学生に配慮した時間

社会人学生の学修環境に配慮し、講義は平日の夕方以降と土曜日に集中的に開講しています。

田町キャンパス　時間割タイムテーブル

時限	時間帯	月	火	水	木	金	土
1–2時限	8：50 – 10：30						●
3–4時限	10：40 – 12：20						●
5–6時限	13：10 – 14：50						●
7–8時限	15：00 – 16：40						●
9–10時限	16：50 – 18：30			●			●
11–12時限	18：40 – 20：20	●	●	●	●	●	

東工大の学修インフラ

本学の図書館や文献データベース等を無料で利用することができます。フルタイム学生には専用のデスクが提供されます。

Ookayama
大岡山キャンパス

Tamachi
田町キャンパス

豊富で柔軟なカリキュラム

専門知識や技術を学ぶために、関連する科目を科目群としてまとめて、
年次や習熟度に併せて体系的に学べるように構成しています。

コンセプト

技術・経営の知を創造・活用し実践する実務家やイノベーターを養成することを目的に、以下の科目群を設けています。

A. 技術経営基礎科目群：
分析、思考とコミュニケーションの方法論

B. 技術経営専門科目群：
技術経営に関する専門知識

C. 経済・社会システム科目群：
経済・社会に関する広範な理解

D. 技術経営実践科目群：
技術経営・イノベーション人材としてのキャリアを自ら開拓

E. 講究・インターンシップ科目群：
広義の研究を通じたイノベーション実践力の涵養

履修科目の認定制度：本学に入学する前に大学院において修得した授業科目の単位を、審査のもとで、本課程の修了必要単位に含めることができます。

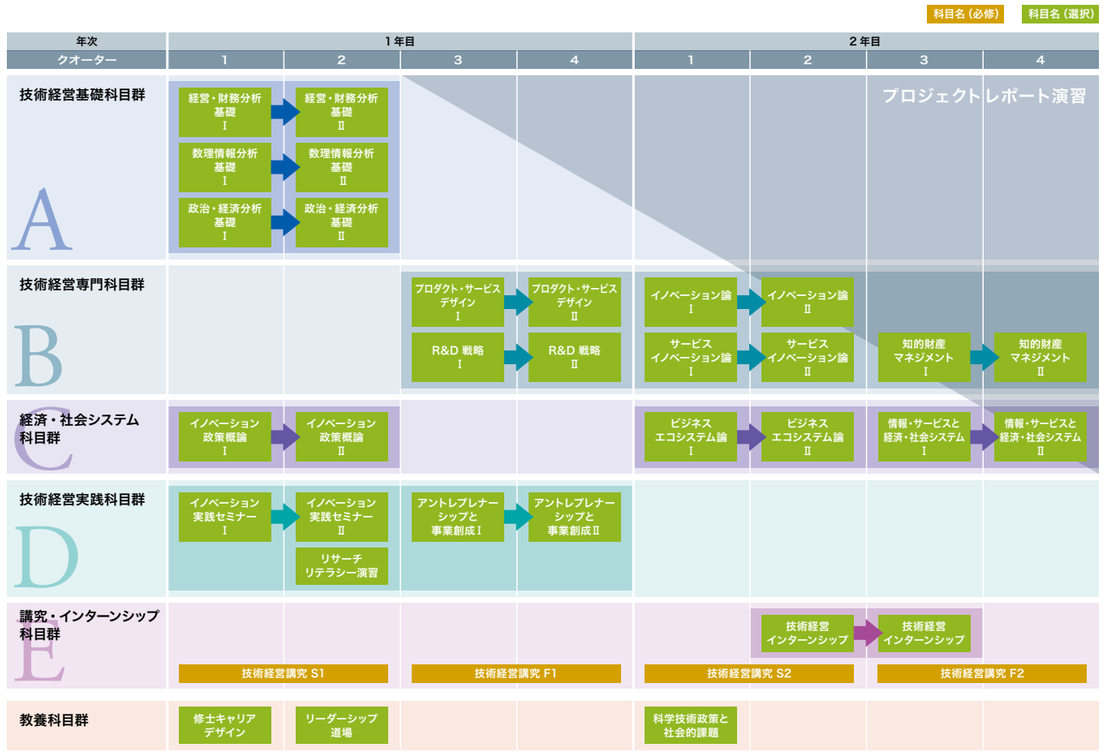
技術経営専門職学位課程の修了要件と年限

40 単位以上を学修要件に従って取得すること。プロジェクトレポートの審査及び最終試験に合格すること。標準的な修業年限は 2 年ですが、上記の要件を満たす場合、特例適用により最短 1 年での修了も可能です。

イノベーション科学コース（博士後期課程）の修了要件と年限

24 単位以上を学修要件に従って取得すること。中間審査、予備審査及び博士論文審査を経て、最終審査に合格すること。その他、学修要件が定める諸要件（外国語の能力、論文・学会発表の実績等）を満足すること。標準的な修業年限は 3 年ですが、学修状況等に応じて、一定の短縮あるいは延長を行えます。

カリキュラム例（技術経営専門職学位課程）

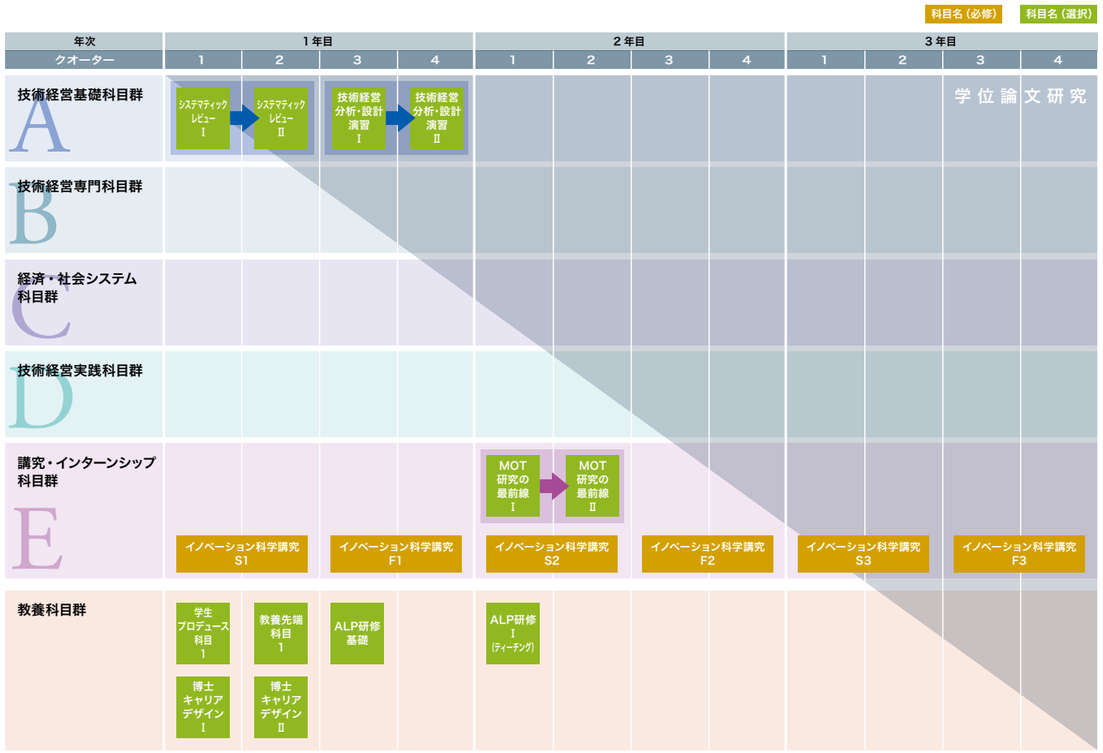


開講科目 Curriculum

科目群	400番台（修士1年目）	500番台（修士2年目）	600番台（博士後期）
A 技術経営基礎科目群 分析、思考、コミュニケーションの方法論 判断のための論理を事実に基づいて自ら構築し、自らが先頭に立って行動することで困難を打開するための、分析や思考、コミュニケーションの基礎力を養成する	経営・財務分析基礎 [2]	社会シミュレーション [2]	システマティックレビュー（通年）[4]
	政治・経済分析基礎 [2]	コーポレートファイナンス [2]	イノベーション分析演習 [2]
	数理情報分析基礎 [2]	ユーザ調査法 [1]	
	ユーザリサーチ概論 [1]	証券投資論 [2]	
	社会科学のモデル・実験入門 [1]	数理情報分析応用 [2]	
	コミュニケーションデザイン論 [1]	科学技術政策と社会的課題 [2]	
B 技術経営専門科目群 技術経営に関する専門知識 技術や経営に関する卓越した知を創造し、新規事業やプロジェクトを戦略的に設計・立案し実行していくための方法論やリテラシーを習得する	イノベーション論 [2]	サービスイノベーション論 [2]	技術経営分析・設計演習 [2]
	R&D戦略 [2]	プロダクト・サービスデザイン [2]	
	経営戦略論 [2]	知的財産マネジメント [2]	
	経営組織論 [2]	リスク・クライシスマネジメント分析 [2]	
		標準化戦略 [2]	
		デジタルマーケティング [1]	
		情報と知識のマネジメント [2]	
C 経済・社会システム科目群 経済、社会に対する広範な理解 科学・技術知の創造を促し、科学・技術知の社会科・産業化を進めることを通じて、豊かな社会を実現するための経済や社会に対する広範な理解を体系的に得る	ビジネスエコシステム論 [2]	科学技術政策分析 Ⅰ：核不拡散の歴史	経済・社会システム分析・設計演習 [2]
	イノベーション政策概論 [2]	エネルギー技術と経済･社会システム [2]	
		バイオ医療技術と経済･社会システム [2]	
		社会インフラと経済・社会システム[2]	
		情報･サービスと経済･社会システム [2]	
		政策プロセス科学特論 [2]	
		先端/防衛技術の研究・開発・試験・評価の政策分析 [1]	
D 技術経営実践科目群 イノベーション人材としてのキャリアを自ら開拓 科学・技術や産業、政策、マネジメント等に関する最前線の動向を把握するとともに、自らを見つめ直し、自分自身でキャリアを切り開いていくための礎とする	リサーチリテラシー演習 [1]	先端技術とイノベーション [4]	研究開発・事業企画立案演習 [2]
		アントレプレナーシップと事業創成 [2]	
		イノベーション実践セミナー [2]	
		経営者論セミナー [2]	
E 講究・インターンシップ科目群 広義の研究を通じたイノベーション実践力の涵養 課題を自ら設定し、課題を解決するために事象と理論を深く探求するという広義の研究活動を通じ、イノベーションのための実践的な能力を涵養する	技術経営講究（通年）[4]	技術経営講究（通年）[4]	イノベーション科学講究（通年）[12] イノベーション研究概論 [1]
	技術経営インターンシップ [2]	技術経営インターンシップ [6]	イノベーションコロキウム [1]
			MOT研究の最前線（通年）[2]

※赤字は英語開講科目です。　※１単位の科目は、１クオーターの開講（週１回・全７回）となります。
※２単位の科目は、一部を除き、２クオーター連続での開講（週１回・全14 回）となります。
※通年の科目は、クオーター毎に履修選択を行います。　※講究科目（ゼミ）は必修です。
※詳細は、学修案内等を参照してください。

カリキュラム例（イノベーション科学コース）



池上研究室

Ikegami Laboratory

池上 雅子 教授

専門分野　技術と安全保障、核セキュリティ・核不拡散、先端技術研究開発政策と技術移転

学　　位　Ph.D. Uppsala University, Sweden & 博士（社会学）東京大学

経　　歴　ストックホルム大学アジア太平洋研究所 (CPAS) 所長・教授、ウプサラ大学経営工学研究科・東北大学国際会計政策大学院 客員教授

科学技術を通して安全保障を追究し平和と人類的課題を極める

核兵器や原子力に象徴されるように、現代の高度科学技術は、人類の存亡を左右する程重大な影響力をもちます。技術は、無限の可能性を持つ一方、制御不能または誤用されれば 核兵器のように人類を滅ぼす事もできます。その絶大な潜在性故、科学技術は厳密には価値自由たりえず、科学技術をめぐる意思決定・政策は、必然的にその道義性・倫理性が問われます。 M.L. キング牧師の “Our scientific power has outrun our spiritual power. We have guided missiles and misguided men" は正鵠を射た卓見です。本研究室では科学技術とイノベーションをめぐる意思決定・政策分析を縦軸に、当該科学技術を取巻く政治経済社会安全保障上の動態分析を横軸に、定性的・定量的方法論を組み合わせた包括的アプローチで科学技術の人類的課題を究明します。本研究室は「科学技術を人類の福利に役立て、叡智を以て紛争予防と平和を実現する」という高い理念の元、安全保障や核セキュリティ、軍事技術研究開発、技術移転といったハードな問題に現実的に取り組みます。当研究室は時代を俯瞰する学際性、革新性、専門的コーチを特徴とし、スウェーデンはじめ海外の大学研究機関 との学術交流を通して国際性を強化します。

代表著書

M. Ikegami, "Missile arms-racing and insecurity in the Asia-Pacific", London: International Institute for Strategic Studies (IISS), 31 August 2021.
Ikegami, M. ‘Prevent Nuclear Catastrophe: Finally end the Korean War', Bulletin of the Atomic Scientists, 15 June 2017; ‘Seeking a Path toward Missile Nonproliferation: A Japanese Response', Bulletin of the Atomic Scientists, *72:6, pp. 365-367, 2016*
Ikegami, M. *Military Technology and US-Japan Security Relations: A Study of Three Cases of Military R&D Collaboration, 1983-1998,* Uppsala University, 1998
Ikegami, M. ‘Japan', in R. Pal Singh (ed.) Arms Procurement Decision Making, Vol. 1, Oxford University Press, 1998, pp. 131-176.
Ikegami, M. ‘Japan: Latent but large supplier of dual-use technology', in H. Wulf (ed.) Arms Industry Limited, Oxford Univ. Press, 1993 pp. 131-176.
Ikegami M. The Military-Industrial Complex: The Cases of Sweden and Japan, Dartmouth: Aldershot/Brookfield USA/ Singapore/Sydney, 1992

社会貢献

経済産業省国立研究開発法人審議会 JAEA 部会委員
日本核物質管理学会 理事・企画委員長員　東京工業大学　原子核工学コース　副担当
東京工業大学 原子力規制庁人材育成プログラム「ANSET: Advanced Nuclear 3S Education and Training」運営委員
Japan Pugwash of the Pugwash Conferences on Science & World Affairs 運営委員
岩波書店『世界』、共同通信、朝日新聞、毎日新聞、日経新聞等への投稿論説多数

因幡研究室

Inaba Laboratory

因幡 和晃 准教授

専門分野　エンジニアリングデザイン、機械工学、マルチフィジックス

学　　位　博士（工学）、慶應義塾大学

経　　歴　カリフォルニア工科大学、東京理科大学、日本学術振興会特別研究員（DC1）

エンジニアリングデザインによる新しい機械・構造物の創出

産学連携プロジェクトや共創スペースにおいて、デザイン思考やエンジニアリングデザインを活用してユーザと共に多くの人が気づいていない（潜在的）課題を抽出し、機械工学、特に構造力学や混相流などの応用力学で課題解決のための要素技術の開発や製品設計を行うことで、ユーザに革新的体験を提供するための研究を行っています。自動車などのモビリティに関する要素技術開発、サイバーフィジカルスペース（CPS）の実現に向けたマルチフィジックス・シミュレーション、産学連携プロジェクトの実践やその分析などを研究対象としています。また、東工大デザイン工房と呼ばれる共創スペースの運用・管理を通じて、ユーザのニーズ抽出（CoLab）、3D プリンタやレーザー加工機等によるプロトタイプ製作（FabLab）、経営者等とのビジネスモデル検討（BizLab）、デライト性評価によるユーザ体験の可視化（ExpLab）といった４つの Lab 活動におけるエンジニアリングデザイン手法の開発・実践や、新たなことものづくりの提案・評価を行っています。

代表著書

Ji, M., Inaba, K., Efficient theoretical and numerical methods for solving free vibrations and transient responses of a circular plate coupled with fluid subjected to impact loadings, J. Press. Vessel Technol., 2021.
Kojima, T., Inaba, K,. Numerical analysis of wave propagation across solid–fluid interface with fluid–structure interaction in circular tube, Inter. J. Press. Vessels Piping, Elsevier, 183, 2020.
Ushifusa, H., Inaba, K., Takahashi, K., Kishimoto, K., Supercritical CO2 generator using bubble collapse by water hammer, J. Supercritical Fluids, 94, 174-181, 2014.
You, J. H., Inaba, K., Fluid–structure interaction in water-filled thin pipes of anisotropic composite materials, J. Fluids Structures, 36, 162-173, 2012.
Inaba, K., Shepherd, J. E., Flexural waves in fluid-filled tubes subject to axial impact, J. Press. Vessel Technol., 132, 021302, 2010.
Shepherd, J. E., Inaba, K., Shock loading and failure of fluid-filled tubular structures, Dynamic failure of materials and structures, Springer, 2009.

社会貢献

ASME PVP FSI Tech Committee, Chair (2021-)
文部科学省 大学等における価値創造人材育成拠点の形成事業 幹事校委員

木村研究室

Kimura Laboratory

木村 英一郎 教授

専門分野　新規事業開発、イノベーション・マネジメント、オープンイノベーション、研究開発マネジメント、フードテック

学　　位　博士（農学）、東京大学
MBA (Innovation)　University of Leicester

経　　歴　味の素、内閣府（科学技術政策）、Stanford Univeristy、Ajinomoto USA、江崎グリコ

最先端のイノベーション・マネジメントでwell-beingの実装を加速する

VUCA 時代、社会の変化や革新的技術開発が益々加速する中で、企業が継続的に成長を続けるためには、企業の成長戦略と一体化したイノベーション・マネジメントが今まで以上に重要になっていきます。当研究室では、Society5.0 の世界で一人一人の幸福（well-being）実現のため、食と健康、環境とサステナビリティ等の人々の生活に関わる分野で、それを実現するための AI/ICT とビッグデータ、デジタルヘルスやセンシング技術、予防医療と PHR の活用、サステナビリティと代替フード、バイオテクノロジーと先端医療、AR/VR/メタバースとウェアラブルデバイス、認知や行動経済学等の領域での事業化における最先端のイノベーション・マネジメントを研究し、社会実装に貢献していきます。
特に、新規事業の創出では、大企業と国内外のスタートアップの価値共創型の協業、CVC や VC の活用、コーポレートベンチャリング、社内ベンチャー制度等、非連続成長を加速するオープンイノベーションの推進の最前線を研究します。アントレプレナーシップ教育では講義に加えプロジェクトレポート研究や講究の中で学生自身のアイディアの事業化シミュレーションなども検討します。また、指導教員自身の国内外の産学官での経験からイノベーション系人財のキャリアパスや、経営者マインドセットについても指導していきます。

代表著書

Miyaki T, Imada T, Hao SS, Kimura E.; Monosodium L-glutamate in soup reduces subsequent energy intake from high-fat savory food in overweight and obese women, Br J Nutr. 2016 Jan 14;115(1):176-84.
Imada T, Hao SS, Torii K, Kimura E.; Supplementing chicken broth with monosodium glutamate reduces energy intake from high fat and sweet snacks in middle-aged healthy women., Appetite. 2014 Aug;79:158-65.
アミノ酸科学の最前線 - 基礎研究を活かした応用戦略 第 3 章－ 1 アミノ酸の製造方法／シーエムシー出版（2014）P.118-126
Wilson AM, Kimura E, Harada RK, Nair N, Narasimhan B, Meng XY, Zhang F, Beck KR, Olin JW, Fung ET, Cooke JP. : Beta 2 microglobulin is a potential biomarker for diagnosis of peripheral arterial disease; Circulation Circulation. 2007 Sep 18;116(12):1396-403.
Nishio Y., Nakamura Y., Kawarabayashi Y., Usuda Y., Kimura E., Sugimoto S., Matsui K., Yamagishi A., Kikuchi H., Ikeo K., and Gojyobori T.: Comparative complete genome sequence analysis of the amino acid replacements responsible for the thermostability of Corynebacterium efficiencs; Genome Research, No. 13, p. 1572-1579 (2003)

社会貢献

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) 事業カタライザー
Science and Innovation for the Next Generation in San Diego (SING) in University of California San Diego, Advisor
神奈川県庁　技術顧問（ライフイノベーション推進室（2018-2019）
国内外スタートアップ　社外取締役　多数（2018～現在）
東京大学 (2003-2004)、東京工業大学 (2006-2007)、立教大学 (2007-2008)　非常勤講師

後藤研究室

Goto Laboratory

後藤 美香 教授

専門分野　企業経済学、エネルギー経済学、技術進歩とイノベーション

学　　位　博士（経済学）、名古屋大学

経　　歴　電力中央研究所、東京工業大学大学院社会理工学研究科

エネルギーと環境から持続可能な社会を考える

企業経営について、技術進歩の促進や多面的な経営効率性の改善をテーマに研究しています。企業や、企業をとりまく経済・社会に関するデータを、計量経済学やマネジメント・サイエンスの手法を応用して分析する実証研究を行っています。近年、私たちを取り巻く社会は大きな変化に直面しています。エネルギー問題や環境問題がそうであるように、さまざまな課題は複雑に絡み合っているため、１つの企業や産業、さらには１国のみでも解決が難しいグローバルな問題が増えています。持続的に発展可能な社会の一員として、企業が目指す経営とはどのようなものか、企業と社会とのかかわりを、技術やマネジメントなど、多面的に分析し考察していきます。当研究室では、大学での文系出身・理系出身を問わず、さまざまな情報を活用した企業経営の定量的分析や、エネルギー・環境に関する政策研究に関心のある人を歓迎します。多くの情報が多様な媒体を通じて得られる現代社会において、自分なりに仮説を立て検証する能力はますます重要になっています。ものごとを深く観察するとともに、全体を俯瞰し、課題について考察した結果を国際的な視野に立って積極的に社会に発信することのできる人材を目指します。

代表著書

Sueyoshi, T., Goto, M. Environmental Assessment on Energy and Sustainability by Data Envelopment Analysis. John Wily & Sons. London, UK, 2018.
Goto, M., Sueyoshi, T. Sustainable development and corporate social responsibility in Japanese manufacturing companies. Sustainable Development 28(4), 844-856, 2020.
Mohammed Atris, A., Goto, M. Vertical structure and efficiency assessment of the US oil and gas companies. Resources Policy 63, 101437.
Goto, M., Mohammed Atris, A., Otsuka, A. Productivity change and decomposition analysis of Japanese regional economies. Regional Studies 52(11), 1537-1547, 2018.
Goto, M., Otsuka, A., Sueyoshi, T. DEA (Data Envelopment Analysis) assessment of operational and environmental efficiencies on Japanese regional industries. Energy 66, 535-49, 2014.

社会貢献

公益事業学会　理事
Economics of Energy & Environmental Policy, International Association for Energy Economics, Editorial Board Member
内閣府 消費者委員会 専門委員

西條研究室

Saijo Laboratory

西條 美紀 教授

専門分野　コミュニケーションデザイン、
イノベーションの普及、知識管理、談話管理
学　　位　博士（人文科学）、お茶の水女子大学
経　　歴　早稲田大学、
東京工業大学留学生センター 助教授

コミュニケーションデザインによるイノベーションの創出

道具はどのように人々の相互作用の中で再発明されるのか、どのようなリテラシーの人にどのようなコミュニケーションがリスク管理の観点から有効なのか、“ 多様な人々の間の対話は決裂しやすく、似た者同士の対話は発見がない ” という命題を克服するためにどんなデザインが考えられるか、といった内容を、現実のフィールドでの事象に関与し、分析し、その結果を現場に戻す Action Research により研究を進めています。これまで、質問紙調査と多変量解析による科学技術リテラシーのモデル化、地域における住宅用太陽光発電の普及・維持、自治体・地域住民・企業との協働による課題解決、高齢者向け電動アシスト自転車の社会技術開発等、多くの社会的課題に取り組んできました。ユーザーイノベーションを人々の相互作用の観点から分析したい人、相互に共通点があまりない人々のコミュニケーションのなりたちに興味がある人、職場のコミュニケーションの問題を俯瞰的に考えてデザインという観点から整理したい人におすすめです。

代表著書

三島聡 編 , 三島聡 , 守屋克彦 , 本庄武 , 高木光太郎 , 森本郁代 , 西條美紀 , 大塚裕子 , 野原佳代子 , 大貝葵 , 石塚章夫 . 裁判員裁判の評議デザイン 市民の知が活きる裁判をめざして , 裁判員裁判の評議デザイン ー市民の知が活きる裁判をめざして , 日本評論社 , Sep. 2015.
Saijo, M., et al. Elucidating and Creating Working Knowledge for the Care of the Frail Elderly Through User-Centered Technology Evaluation of a 4-Wheel Electric Power Assisted Bicycle: A Case Study of a Salutogenic Device in Healthcare Facilities in Japan. Knowledge Discovery, Knowledge Engineering and Knowledge Management Volume 553 of the series Communications in Computer and Information Science pp 605-620, Springer International Publishing Switzerland, 2015.
Saijo, M., et al. Elucidating Multi-disciplinary and Inter-agency Collaboration Process for Coordinated Elderly Care: A Case Study of a Japanese Care Access Center, Knowledge Discovery, Knowledge Engineering and Knowledge Management Volume 454 of the series Communications in Computer and Information Science pp 357-369, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 2015.
西條美紀 ,『コミュニケーションデザイン』, くろしお出版 , 2014.
西條美紀 . 社会言語学 , 藤永保 監修『最新 心理学事典』, 平凡社 , 東京 , 2013.

社会貢献

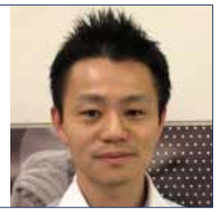
日本学術会議　総合工学委員会　連携会員
高温ガス炉及び水素製造研究開発・評価委員会　委員

笹原研究室

Sasahara Laboratory

笹原 和俊 准教授

専門分野　計算社会科学、ソーシャルメディア、
データサイエンス、複雑系科学
学　　位　博士（学術）、東京大学
経　　歴　名古屋大学、理化学研究所 BSI、東京大学



計算社会科学による価値創造と社会イノベーション

ICTやIoTの進化による社会のデジタル化やウェブのソーシャル化等によって、人々の行動の詳細がデジタルに記録・蓄積されるようになりました。当研究室では、このような人間行動に関する大規模なデータ（ビッグデータ）を「計算社会科学」の方法論で分析・モデル化し、得られた知見と洞察を価値の創造や社会イノベーションに実践する研究をしています。計算社会科学とは、ビッグデータやコンピュータの活用が可能にするデジタル時代の社会科学です。 (1) 人間が生み出すビッグデータの分析、(2) デジタルツールを活用した実験・調査、(3) 社会現象のモデリング、これら3つの方法を駆使して、個人や集団、そして社会をこれまでにない解像度とスケールで定量的に研究する学際領域です。当研究室では、特に、ソーシャル・ネットワークにおける情報の多様性・信頼性を動的に維持する原理と技術を探究しています。ヒト、モノ、コト（情報）がオンライン（情報環境）とオフライン（実世界）の垣根なく相互接続するSociety 5.0において、このような原理と技術は、価値創造の源泉としてのソーシャル・キャピタルの新たな可能性を切り拓き，様々な社会イノベーションへの応用が期待されます。

代表著書

K. Miyazaki et al., Aggressive behaviour of anti-vaxxers and their toxic replies in English and Japanese, Humanit. Soc. Sci, 2022
D. Gamage, et al., Are deepfakes concerning? Exploring societal implications of deepfake conversations on Reddit, CHI'22, 2022
W. Xu and K. Sasahara, Characterizing the roles of bots on Twitter during the COVID-19 infodemic, J. Comput. Soc. Sci., 2022
K. Sasahara et al.,Social Influence and Unfollowing Accelerate the Emergence of Echo Chambers, J. Comput. Soc. Sci., 2021
笹原和俊『フェイクニュースを科学する 拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人 , 2021

社会貢献

国立情報学研究所 客員准教授
計算社会科学会理事
東京大学情報基盤センターデータ科学専門委員会 委員
愛知県立旭丘高校 SSH 運営指導委員

齊藤研究室

Saito Laboratory

齊藤 滋規 教授

専門分野　デザイン思考を活用した製品・サービス開発、
エンジニアリングデザイン、
ユーザー中心設計
学　　位　博士（工学）、東京大学
経　　歴　東京大学大学院工学系研究科

価値を創造する製品・サービス開発を通じて世の中を活き活きとデザインする

変化の激しい現代においては、新たな市場創造、顧客創造を念頭においた高付加価値を持つ製品・サービスの絶え間ない開発が求められています。例えば、企業がデザイン思考などの考え方を製品・サービス開発のプロセスに組み入れようとする近年の動きは，これに対応したものだと考えられます。当研究室では、エンジニアリングデザイン、ユーザー中心設計、工学教育、産学連携の観点から、東京工業大学において実践されている産学協同形式の Project-Based-Learning (PBL) 型授業「エンジニアリングデザインプロジェクト」を主な題材とし、価値創造のための製品・サービス開発プロセスに関する研究を工学的，認知科学的手法を用いて進めています。具体的には、「デザインプロジェクトにおけるメンバーの専門多様性がアイデア創造のプロセスに与える影響」、「洞察問題解決において孵化などの条件が与える影響」などがこれまでの研究題材の例ですが、現実のプロジェクト実施の際に応用可能性が高い知見を得るための研究テーマを広くターゲットとしています．日々の研究・教育活動を通して、世の中を活き活きとデザインする能力や意志を持つ人材の育成に努めています。

代表著書

齊藤滋規 , 田岡祐樹 , “ エンジニアリングデザインと未来洞察 ”, 一橋ビジネスレビュー , , 一橋大学イノベーション研究センター , Vol. 67, No. 2, pp. 64-75, 2019.
東京工業大学エンジニアリングデザインプロジェクト , 齊藤滋規他 ,『エンジニアのためのデザイン思考入門』, 翔泳社 , 2017 年 .
齊藤滋規 , “ 異分野協創エンジニアリングデザインプロジェクトにおける教育効果と実施課題 ”, 工学教育 , 日本工学協会 , Vol.65, No.4, pp. 57-62,2017.
齋藤滋規 , “ 理工系大学の授業革新 ”, ＩＤＥ - 現代の高等教育 , ＩＤＥ大学協会 , No. 582, pp. 31-35, 2016.

社会貢献

日経優秀製品・サービス賞 内部審査員
パナソニック Wonder 賞 審査員
イノベーション教育学会第 4 回年次大会 実行委員長
JST-SICORP 国際共同研究拠点事業 (ASEAN、インド) アドバイザー

杉原研究室

Sugihara Laboratory

杉原 太郎 准教授

専門分野　ユーザスタディ、
ヒューマンコンピュータインタラクション
学　　位　博士（工学）、京都工芸繊維大学
経　　歴　北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科、
岡山大学大学院自然科学研究科

ユーザを通して技術のあり方を, 技術を通してユーザ行動の原理を考える

情報技術はヒトの可能性を大きく拡げて来ましたが、同時に新たな課題ももたらしています。ヒトの行動も情報技術の発展と足並みをそろえるように高度に組織化・複雑化してきており、ヒトと情報技術の間に生じる問題を丁寧に紐解いていくことは、学術的にも実務的にも意義の大きいことと考えています。当研究室は、情報技術のユーザの思考・行動を分析することを通してユーザ行動の原理に迫るとともに、ユーザ行動の分析を通して技術のあり方を探求しています。研究室のような制限された環境ではなく、現場に出て、技術の利用文脈の中での最適解を模索するアプローチを採用しています。複雑で時々刻々と変化する現場の文脈に照らしてユーザの要望を捉え、技術解決可能な課題として整理します。その後、課題を解決するための技術的な、あるいは社会的な解決方法を考案、実装し、現場に適用し、その成果を定量的あるいは定性的に評価します。研究テーマは、この一連の流れ、あるいは流れの一部から、学生と相談しながら決定します。教育研究を通して、ヒトと情報技術の調和について考え、技術と社会とサービスの間に横たわる課題を解決できる人材育成に貢献したいと考えています。

代表著書

Sugihara, T., Kanehira, T., Suzuki, M., Araki, K.: Behavioral signs of an unintended error in nursing information sharing with electronic clinical pathways: a mixed research approach. Informatics for Health and Social Care, 1-16, 2021
Leroi I, Watanabe K, Hird N, Sugihara, T.: “Psychogeritechnology” in Japan: Exemplars from a super-aged society. Int J Geriatr Psychiatry. 2018;1–8. https://doi.org/10.1002/gps.4906
Sugihara, T., Fujinami, T., Jones, R., Kadowaki, K. and Ando, M.: Enhancing Care Homes with Assistive Video Technology for Distributed Caregiving, AI & Society. Vol. 30 Issue 4, pp 509-518 Springer-Verlag London. DOI 10.1007/s00146-014-0560-9 (2015) (Published online before print Nov. 2014)
Sugihara, T., Fujinami, T., Phaal, R. and Ikawa, Y., A technology roadmap of assistive technologies for dementia care in Japan, Dementia, vol. 14 no. 1 80-103, (2015) (Published online before print June 27, 2013)
杉原太郎，藤波努，高塚亮三：グループホームにおける認知症高齢者の見守りを支援するカメラシステム開発および導入に伴う問題，社会技術研究論文集，Vol. 7，pp. 54-65，2010

社会貢献

ARG Web インテリジェンスインタラクション研究会副委員長
情報処理学会　AAC 研究会　主査

仙石研究室

Sengoku Laboratory

仙石 慎太郎 教授

専門分野　技術経営学、イノベーション経営論、バイオ・ヘルスケア産業論

学　　位　博士（理学）、東京大学

経　　歴　マッキンゼー・アンド・カンパニー、ファストトラック・イニシアティブ（VC）、京都大学

技術・イノベーション経営の理論と実践を学際的に共進する

バイオ･ヘルスケア分野を中心に、自然科学･工学と自然科学を横断した、理論構築と実践展開のイノベーションサイクルの実現に向けた研究教育活動を行っています。1. 知的生産活動のマネジメント：研究開発をはじめとする知的生産活動に資する経営管理フレームワークやツールを開発します。2. 学際・融合のマネジメント：学際連携・異分野融合研究開発プログラム・プロジェクトの事例観察を通じ、その効率化と価値最大化に求められる、組織的マネジメント上の要点を明らかにします。3. 産学公連携のマネジメント：日本のアカデミア及び産業界の特性とニーズに適合した、産学公連携モデルの開発・実装を行います。4. 統合的イノベーション・マネジメント：サイエンス・リンケージ研究、産業クラスター研究やビジネスモデル研究に立脚した、技術・イノベーション経営の標準アプローチを開発・提案します。5. 知的プロフェッショナル育成プログラムの開発・体系化：上述の一連の活動を通じて、次世代のイノベーションを担う人材に対して、インテグリティー、技術・スキル、アントレプレナーシップ及びリーダーシップの涵養を図るための教育プラットフォームを開発し、講義を通じて実践します。

代表著書

Miyashita, S., & Sengoku, S. (2021). Scientometrics for management of science: Collaboration and knowledge structures and complexities in an interdisciplinary research project. Scientometrics, 126(9), 7419-7444.
Onodera, R., & Sengoku, S. (2018). Innovation process of mHealth: An overview of FDA-approved mobile medical applications. Int J Med Inform, 118, 65-71.
Avila-Robinson, A., & Sengoku, S. (2017). Multilevel exploration of the realities of interdisciplinary research centers for the management of knowledge integration. Technovation, 62, 22-41.
Lauto, G., & Sengoku, S. (2015). Perceived incentives to transdisciplinarity in a Japanese university research center. Futures, 65, 136-149.
Kodama, H., Watatani, K., & Sengoku, S. (2012). Competency-based assessment of academic interdisciplinary research and implication to university management. Res Eval, 22(2), 93-104.
Anzai, T., Kusama, R., Kodama, H., & Sengoku, S. (2012). Holistic observation and monitoring of the impact of interdisciplinary academic research projects: An empirical assessment in Japan. Technovation, 32(6), 345-357.

社会貢献

内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 地域における人とくらしのワーキンググループ（2015-2017）
日本 MOT 学会 学会誌編集委員、研究・イノベーション学会 評議員
京都大学・東京農工大学等 非常勤講師
東京大学 未来ビジョン研究センター ライフスタイルデザイン研究ユニット 客員教授

辻本研究室

Tsujimoto Laboratory

辻本 将晴 教授

専門分野　経営戦略論、経営組織論、エコシステム戦略論

学　　位　博士（政策・メディア）、慶應義塾大学

経　　歴　法政大学大学院イノベーションマネジメント研究科

製品･サービスシステム（エコシステム）の歴史分析、再設計、実装によって現実の社会を変える

エコシステム戦略論を主要なテーマとして研究を行っています。エコシステム戦略論は生物学におけるエコシステムの考え方をアナロジー（類推）として用いて、製品・サービスシステムの動態的変化のメカニズムとパターンをより良く理解しようとする考え方です。経営戦略論の中心的なアプローチは、特定の企業・商取引関係のある企業群を対象にしてその優位性や競争戦略、協調戦略を考えようとするものです。エコシステム戦略論の考え方は、既存の経営戦略的分析の範囲を拡張し、直接的な商取引関係や競争関係のない関係者も含めた俯瞰的な視点からエコシステム（系）の全体的な構造とその動作メカニズム、動作パターンを分析しようとするものです。具体的には、ある製品・サービスシステムの提供に関わるすべての主体の長期間にわたる相互作用を視野に入れて歴史的な調査と分析を行います。その上で、エコシステム全体の構造的把握と、その動態的な変化におけるメカニズム、パターンを探索します。これにより、エコシステムの成長のために意図的に（戦略的に）エコシステムを再設計し、動作をコントロールする可能性を検討します。

代表著書

Tsujimoto, M., Matsumoto, Y., Sakakibara, K. Finding the 'Boundary Mediators' :Network Analysis of the Joint R&D Project between Toyota and Panasonic. Int. J. Tech Mgt 66(2/3), 2014.
Tsujimoto, M. The Inertia of Service Definition: A Comparative Analysis of the FeliCa Ecosystem. R&D Mgt Conference, June 23-6, Pisa, Italy, 2015.
Ohara, K., Tsujimoto, M. Network Structure Analysis of APIs and Mashups: Exploring the Digital Ecosystem. R&D Mgy Conference, June 23-26, Pisa, Italy, 2015.
Tsujimoto, M., Kajikawa, Y., Tomita, J., Matsumoto, Y. Designing the Coherent Ecosystem: Review of the Ecosystem Concept in Strategic Management. PICMET, August 2-6, Portland, USA, 2015.
榊原清則 , 松本陽一 , 辻本将晴 .『イノベーションの相互浸透モデル：企業は科学といかに関係するか』白桃書房 , 東京 , 2011.

社会貢献

Technological Forecasting and Social Change, Guest Editor
ウシオ電機 ヤングエクゼクティブ研修
株式会社テクノバ 水素ビジネスエコシステム検討会 委員
文部科学省 大学発ベンチャー調査 調査アドバイザリー
文部科学省 イノベーション測定 委員

中丸研究室

Nakamaru Laboratory

中丸 麻由子 教授

専門分野　社会シミュレーション、人間行動進化学、数理生物学、進化ゲーム理論

学　　位　博士（理学）、九州大学

経　　歴　静岡大学工学部、東京工業大学大学院社会理工学研究科

社会を進化とシミュレーションで切る！

人間や社会の本質とは何か、という問は数千年前からの大きな研究課題です。いまだに明確な答えが出ず、古今東西の研究者が様々なアプローチをとって研究を進めてきました。中丸研究室では、進化生態学的な観点を基にして、数理モデルやシミュレーションという研究ツールを使い、人間社会の本質や社会システムのメカニズムを探ります。人間の本質に迫るために、当研究室では人間社会の基盤である「協力」に着目しています。「協力」する事は当たり前と思うかもしれません。しかし協力への「ただ乗り問題」は至る所で生じています。日常生活や職場においてグループで生活している以上、回避できない問題となっています。そこで中丸研究室では、以下の２点を中心にして研究を進めています。

1. どのような仕組みによってただ乗りを回避することが可能なのかを探る：人々は様々なルールや制度を作って協力を促してきました。古くからある通文化的な慣習や組織に着目して研究をするとともに、現在における組織のあり方も探ります。また、有限と言われている地球上の資源の中でも生態系に着目し、持続可能な生態系利用に関する制度設計にもつなげていきます。

2. 人の協力行動の究極要因を探る：協力行動は進化的な基盤があると言われています。そして人の協力行動の背後には道徳や社会規範の存在があり、それらには他の生物には類い希な高度な認知能力、共感能力、言語能力等が関係していると言われています。それらが進化した要因を探るとともに、1 の研究に生かしていきます。人間に特有と言われている能力の進化基盤を探ることは、人間だから可能であるイノベーションの創発・普及に関する基礎的な研究にもつながります。

代表著書

Nakamaru, M. 2023 "Trust and Credit in Organizations and Institutions: As Viewed from the Evolution of Cooperation", Springer-Nature, 340 pp.
中丸麻由子 ,『社会の仕組みを信用から理解する：協力進化の数理』, 共立出版 , 東京 , 2020.
Nakamaru, M. Shimura, H., Kitakaji, Y. and Ohnuma, S. (2018) The effect of sanctions on the evolution of cooperation in linear division of labor. Journal of theoretical biology 437, 79-91.
Nakamaru, M., Yokoyama, A. The effect of ostracism and optional participation on the evolution of cooperation in the voluntary public goods game. PLoS ONE 9(9), e108423, 2014.

社会貢献

日本学術会議連携会員（第２４－２５期）
人間行動進化学会　理事
日本数理生物学会　運営委員

日髙研究室

Hidaka Laboratory

日髙 一義 教授

専門分野　サービスサイエンス、サービスデザイン、プロダクト・サービス・システム、エネルギー需要科学

学　　位　博士（理学）、早稲田大学

経　　歴　日本 IBM、IBM ワトソンリサーチセンター、北陸先端科学技術大学院大学

サービスサイエンスとサービスイノベーションによる次世代の成長

サービスを科学の対象として捉え、その生産性と質を向上させ、イノベーションを実現するための「サービス科学 (サービスサイエンス)」を柱として研究・教育の実践に取り組んでいます。ここでいうサービスとは第３次産業であるサービス産業のみを指すのではありません。社会・経済における機能としてのサービスを指します。コンピテンシーの提供と共創による適応対象の価値の発現への寄与がサービスの定義となります。様々な数理的・分析的手法、社会科学的手法を、必要があれば新たに吸収して問題の本質に迫れるような研究室でありたいと思っています。エネルギー、環境、交通、医療、福祉など social service system における問題解決とイノベーション、情報産業の次世代の成長、ネットワーク社会における新規サービス・ビジネスの創出、企業におけるサービスの研究開発戦略と実践、製造業におけるサービス化戦略と実践、サービス産業の生産性・質の向上など、サービス科学の対象とする領域は多岐にわたります。次世代の社会・経済の成長に資する新しい枠組みとしてのサービス・システムを支える知識体系を皆で追求しましょう。

代表著書

Y. Shimoda, Y. Yamaguchi, Y. Iwafune, K.　Hidaka, A. Meier, et al., "Energy demand science for a decarbonized society in the context of the residential sector", Renewable and Sustainable Energy Reviews, Vol. 132, Oct. 2020.
川本 , 錦織 , 日髙 電力消費量に関する比較情報が電力消費行動と再生可能エネルギーの利用意識へ与える影響 , 電気学会論文誌 C,Vol.140,No.5,2020
Amaha S.,Nishikiori S.,Hidaka K., Why do customers switch the contract to a local or renewable electricity supplier?", Proc. of ECEEE Summer Study,5-265-19,pp.917-927, June 7th 2019.
Hidaka, K. Services Science, Management, and Engineering (SSME) in Japan, Handbook of Service Science, Springer, pp.707-15, 2010.
Hidaka, K. Trends in Services Sciences in Japan and Abroad, Science & Technology Trends Quarterly Review, NISTEP, No. 19,pp.35-47, 2006.
Hidaka, K., Okano, O. An Approximation Algorithm for a Large-Scale Facility Location Problem, Algorithmica 35, 216-24, 2003.

社会貢献

科学技術振興機構・RISTEX 問題解決型サービス科学研究 P. A.
文部科学省 サービス・イノベーション人材育成推進委員会 委員
情報処理学会フェロー
サービス学会会長（第４期）

所属教員

周 絹	助教	環境・社会理工学院
宮下 修人	助教	環境・社会理工学院
古俣 升雄	特任教授	東京工業大学 キャリアアップMOT
武内 瑞智	特任教授	東京工業大学 環境・社会理工学院
梶川 裕矢	特定教授	東京工業大学 環境・社会理工学院
八尋 俊英	特定教授	日立コンサルティング　代表取締役　取締役社長
西尾 泰和	特定准教授	サイボウズ・ラボ システムエンジニア

修了生の就職先 (H27.3-R5.3 修了)

アクセンチュア、NTT ドコモ、M-IT ソリューションズ、科学技術振興機構、経済産業省、コカ・コーライーストジャパン、国際石油開発帝石、サイバーエージェント、産業技術総合研究所 特別研究員、全国銀行協会、シンプレクス株式会社、ソニー、第一生命保険、大連理工大学、大和証券、大和証券グループ、武田薬品工業、DMG 森精機、東京都、東京海上日動あんしん生命、東京海上日動火災保険、東京交通短期大学、日本アイ・ビー・エム、日本工営、野村アセットマネジメント、野村證券、パシフィックコンサルタンツ、PwC あらた有限責任監査法人、ビズリーチ、富士ゼロックス、プライスウォーターハウスクーパース、PwC Japan、本田技研工業、マクラガンパートナーズアジア　インコーポレーテッド、McKinsey & Company、みずほ銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、明治安田生命、ヤフー、リクルートホールディングス、ルネサスエレクトロニクス、レイスグループ、ローランド・ベルガー、ワークスアプリケーション、Y's & partners、東北テクノアーチ、大和証券グループ、科学技術振興機構、東京都、DMG 森精機、シンプレクス株式会社、レイスグループ、ダイキン工業、日立製作所、TRW オートモーティブ ジャパン、任天堂、日本タタ・コンサルタンシーズ、KDDI 総合研究所、富士通、大成建設、SCSK、Avery denisson Japan

在学生の海外留学実績

アールト大学（フィンランド）
ジョージア工科大学（米国）
シンガポール国立大学（シンガポール）
スイス連邦工科大学（スイス）
チャルマース工科大学（スウェーデン）
ハンブルク工科大学（ドイツ）
EM リヨン経営大学院（フランス）

活躍する先輩たち

▶ 中国と日本のビジネスをつなぐ架け橋に

王 琳琦さん
アクセンチュア株式会社
製造流通本部 マネジメントコンサルタント

2005年　東京工業大学 第5類 入学
2009年　東京工業大学 工学部情報工学科 卒業
2011年　東京工業大学 大学院
　　イノベーションマネジメント研究科
　　技術経営専攻 修士課程修了

元々理系出身だったので、社会科学系の授業についていけるか心配でしたが、進学前のイメージとは違ってやり遂げることができました。研究科に進学して一番よかったと思うのは、学友に恵まれたことで、フルタイムの学生は皆、自分と感覚が近い人が多く、とても意気投合しました。就職活動も授業もいろいろな面で相談しあうことができました。社会人の皆さんからは、たくさんの助言をいただくことができました。講究（ゼミ）では、文献の輪読もあり、いろいろ自分で調べてやることがよかったと思います。研究テーマにも縛りがなく自由にやってよく、ゼミの中での発言も自由にできたので、自分にとってはやりやすい環境でした。合宿も年に１回は行って、研究発表や議論などとても楽しかったです。

▶ 科学的手法と情熱で、共感を生む戦略を

児玉 洋一さん
三井化学株式会社 経営企画部

1999年　三井化学株式会社（現在まで）
2008年　東京工業大学 大学院
　　イノベーションマネジメント研究科イノベーション専攻
　　博士後期課程入学
2012年　東京工業大学 大学院
　　イノベーションマネジメント研究科イノベーション専攻
　　博士後期課程修了 博士（技術経営）学位取得

東工大は「卓越した専門性」と「リーダーシップ」を併せ持つ人材育成方針に共鳴した理工系人材が集まる学びの場だと言えます。また、私が所属していた大学院イノベーションマネジメント研究科は、社会人学生が多く、日中の仕事に関する意見交換はもとより、実際の仕事上の人的ネットワークも作れる実践的な場でもありました。科学哲学・社会科学・経営学に関するゼミを通じて理解した科学的方法は物事を論理的に考える基本として役立っています。また、対話式・グループワーク式の授業では活発な討論が行われ、教員や学生仲間の多様な視点を肌で感じることができ、さらに、自分自身のいまの仕事で問題意識として持っていた内容を研究テーマに設定したことで、仕事に直結する示唆を得ることができました。

BMOT

Beyond Management of Technology
イノベーション科学系 / コース・技術経営専門職学位課程同窓会

BMOT は在校生・修了生及び現・旧教員のネットワークを形成し、会員相互の親睦を深めるとともに、有意義な活動を通じて使命達成に協力することを目的として、以下をはじめとする活動を行っています。

1. 会員の親睦を深める活動
2. 当系/コース・課程への支援活動
3. 会員の消息把握および維持管理活動

キャリアアップＭＯＴプログラム（ＣＵＭＯＴ）

働きながらＭＯＴを学び、キャリアに活かす

キャリアアップＭＯＴとは

社会人アカデミーのプログラムとして、環境・社会理工学院 技術経営専門職学位課程が実施する MOT（技術経営）に関するサーティフィケート・プログラムで、修了者には修了証書が授与されます。平日夜、週１回の通学など、社会人の方が働きながら MOT の学びを通じて、キャリア形成を図ることを支援する取り組みです。多様な業界・業種から、経営者、マネージャー、若手などが参加され、これまで 15 年間で 1,600 名以上の社会人の方が受講しています。受講場所は通学の場合、田町キャンパス（JR 田町駅徒歩２分）です。コースによって Zoom でのオンライン講義形式により全国からの受講も可能です。

プログラムの位置づけ

CUMOT で提供するプログラム／コースは、本学の MOT 教育ノウハウ、現場・実践を意識したカリキュラム（シミュレー ションやケース教材の利活用）、少人数制による質の高い講義と相互学習をもとに、次世代の企業経営を担う中核人材のキャリアアップを支援します。

コースの紹介

MOT を１ 年間で学ぶエッセンシャル MOT コース（11 科目、全 36 回）など多様なコースを提供しています。１回２時間または１ 日単位の構成で、受講期間は１か月から１年となっています。コースの詳細は Web サイトでご確認ください。

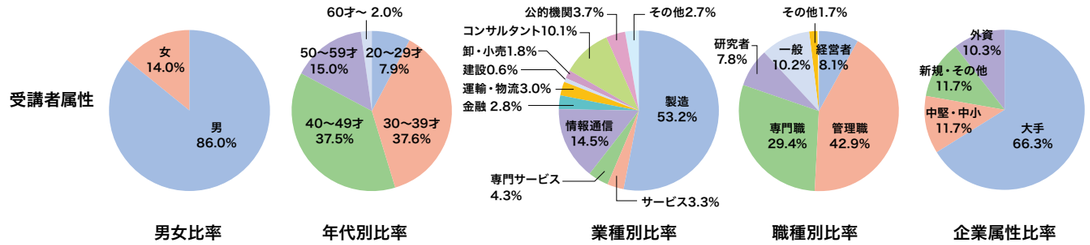
https://www.academy.titech.ac.jp/cumot/course.html

受講実績

受講アンケートによる評価の例 (5 段階評価による平均)

満足度　エッセンシャル MOT 4.2　知的財産戦略 4.7

業務への役立度　エッセンシャル MOT 4.3　知的財産戦略 4.5



※受講者1,584名（2022年3月現在）の願書等に基づいて集計

受講された方の声

- 自らがイノベーションを考えなければならないということを肌身で感じられた（エッセンシャルMOT）
- 色々な背景を持つ方と一緒に学ぶ機会は貴重でした。また、様々なバックグラウンドの先生から学ぶことが出来たのは、本当に良かったです（エッセンシャルMOT）
- 回数を重ねるにつれて講義が面白くなってきました。東京工業大学ならではの先端的なマネジメントの知識を習得することができました（エッセンシャルMOT秋季）
- 単一科目の内容についての知識を得たり理解を深めるのみならず、技術経営全体としてそれぞれの講義内容の関係性を意識しながら学ぶことができた（エッセンシャルMOT夏季）
- 企業において、日本において、知的財産の創造、保護活用が重要であること、各部署、各機関との連携が大切であることの理解を深めました。また、学ぶことの楽しさ、大切さに気付かされました。今後も学びの継続とアウトプットをしていきたいと思います（知的財産戦略）
- 実体験を伴う講師の方々のお話は常にスケールが大きく、見渡すべき視野の広さや時間の尺度など様々な点において、これまでの自分の見方や考え方は限定的であったと感じるようになった（CUMOT × STAMP連携プログラム）
- サービスのような無形のものでイノベーションを起こし、価値を生み出していくための気づきが得られた（サービスイノベーション集中）
- キャリアという社会人誰しもが関心を持つテーマを、様々な切り口から学ぶことが出来ました。キャリアを考え直す機会と、受講生との長期的な関係性は得ることが出来たと思っています（スタートアップデザイン）
- 自社の標準化戦略を考えていくにあたり、「世界全体を俯瞰した全体論」と「過去の事例による具体論」を両面から学ぶことができ、有益であった（標準化戦略実践）
- DX やデータドリブン経営が叫ばれる中、IT への依存度が飛躍的にあがることで、サイバーセキュリティに対する企業の姿勢が経営課題に直結することが理解できた（サイバーセキュリティ経営戦略）

実施体制・プログラム修了の認定

主催：東京工業大学社会人アカデミー　実施主体：環境・社会理工学院 技術経営専門職学位課程
修了認定：修了者には社会人アカデミー長名の「修了証書」を交付いたします。評価については、出席状況を含め、コースごとに行います。

キャリアアップＭＯＴ　担当教員

古俣 升雄　特任教授
専門分野　キャリアデザイン、リカレント教育
学　　位　経営学修士（キャリアデザイン学）法政大学

お問い合わせ

●メールアドレス：cumot-info@mot.titech.ac.jp
●詳細・最新情報は、専用Web サイトをご参照ください。
https://www.academy.titech.ac.jp/cumot/

お問い合わせ

東京工業大学　環境・社会理工学院
イノベーション科学系 イノベーション科学コース
技術経営専門職学位課程

所在地　〒108-0023　東京都港区芝浦3-3-6
キャンパス・イノベーションセンター

電　話　03-3454-8912
E-mail　inv-jim@mot.titech.ac.jp

2023年 3月 発行